

### 第3回 鎌倉時代の刀

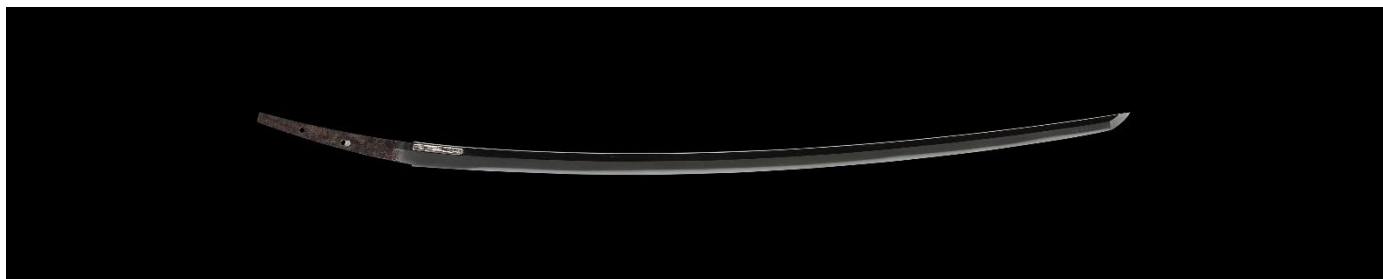
#### <鎌倉初期>【1184年～1221年】

源頼朝が鎌倉に幕府をひらいて武士階級を支配しようとししました。しかし事実上は東国を支配するにとどまり頼朝が歿すると京都では反幕府勢力が強くなり、公武二元支配（天皇と武士）となりました。

これに乗じて後鳥羽上皇が西面の武士を新設し寺社と提携して武芸を奨励しました。そして京都政権の支配下の諸国より鍛冶の名工を集め「御番鍛冶制度」を作りました。「御番鍛冶（ごばんかじ）」とは、自身で作刀するほど日本刀に強い想いを抱いていた後鳥羽上皇が、全国から選りすぐりの刀鍛冶を集め、12名の刀工にひと月ごとに鍛刀（刀を製造すること）させるという制度です。後鳥羽上皇は刀匠に破格の待遇を与え刀匠の地位向上と生活の安定は日本刀の黄金時代を作りました。御番鍛冶には備前（岡山地方）と山城（京都）から刀工が選ばれました。

公武二体の戦いは「承久の乱」で幕府側が勝利し幕府が全国的な政権を確立することになりました。これまでの間、抗争が続いていたために刀剣の需要が喚起されたことと御番鍛冶の技術が諸国の鍛冶を刺激して刀剣の製作技術は空前の発達を遂げました。

この期の刀は上品な太刀姿から剛健な太刀姿に移行する過渡期にあたり反りは腰反りの太刀姿で元身幅と先身幅の差が縮まり全体的に強さを増しています。



豊後行平の太刀



備前伝 福岡一文字派 宗吉の太刀

#### <鎌倉中期>【1222年～1287年】

鎌倉は武家文化の中心地となり武士の必需品である刀剣の需要も大きくなりました。山城から粟田口国綱、備前から備前三郎国宗・福岡一文字の藤源次助真などが一族を連れて鎌倉に移住してきました。また鎌倉には各地からの刀工が集まり鍛刀の一大中心地となりました。

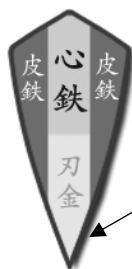
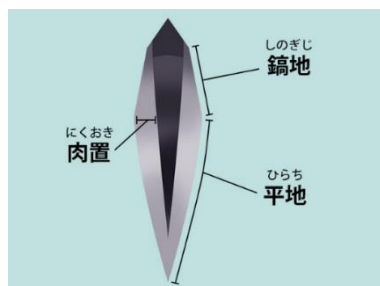
この期の太刀姿は前期より強さを一層強調した姿で反りは腰反りですが、やや浅くなり腰反りから笠木

反り（反りが太刀の中心にちかい）に移行する兆しがみえます。

身幅は広くなり元身幅と先身幅の差が少なくなり刃肉はたっぷりとした蛤刃<sup>はまぐりは</sup>となり頑丈な大鎧を断ち切るのにふさわしい造り込みになりました。

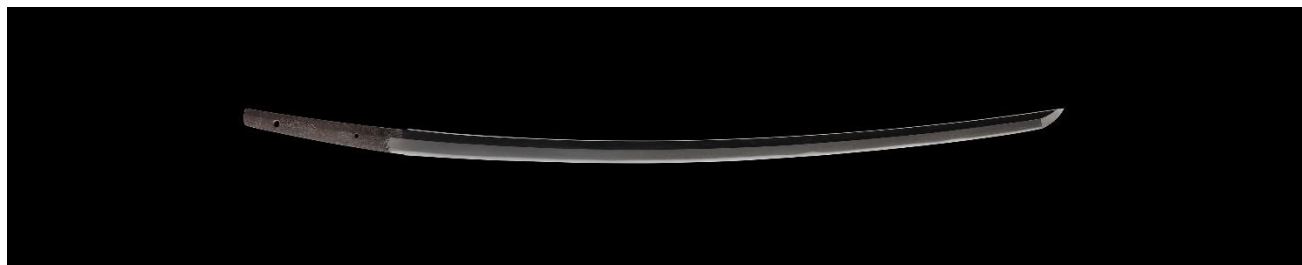
この時期から全国的に短刀が制作されるようになり薙刀<sup>なぎなた</sup>もこの期以降に多く見られるようになります。

#### <刀の断面>

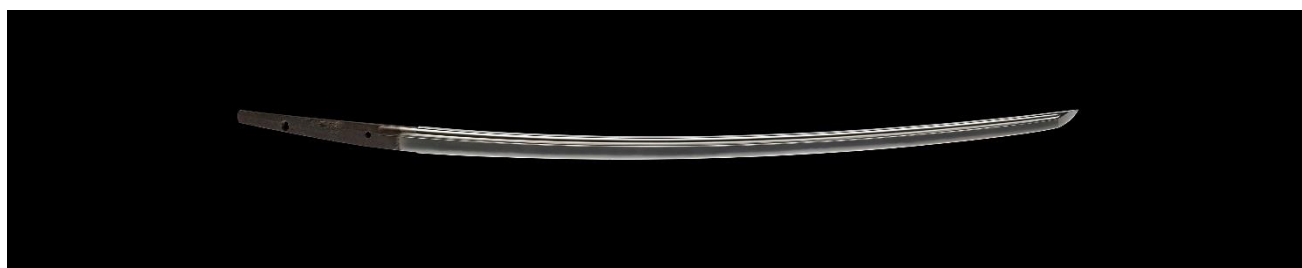


蛤刃は、この部分がふくらみ厚くなる。刃は強く鎧などを断切ることができるが切れ味は落ちる。

#### <鎌倉中期の太刀>



大和伝 為近（ためちか）



備前伝 吉用（よしもち）

#### <短刀>



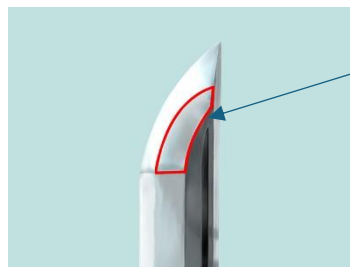
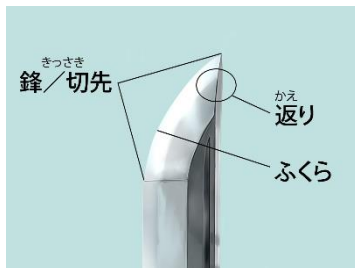
山城伝 来国俊（らいくにとし）

### <鎌倉末期>【1288年～1333年】

中期の末（1281年）に蒙古軍が二度にわたり来襲しました。武士はこれまでの個人戦から集団で戦うやり方にも苦戦しましたが、新たな戦い方を学びました。

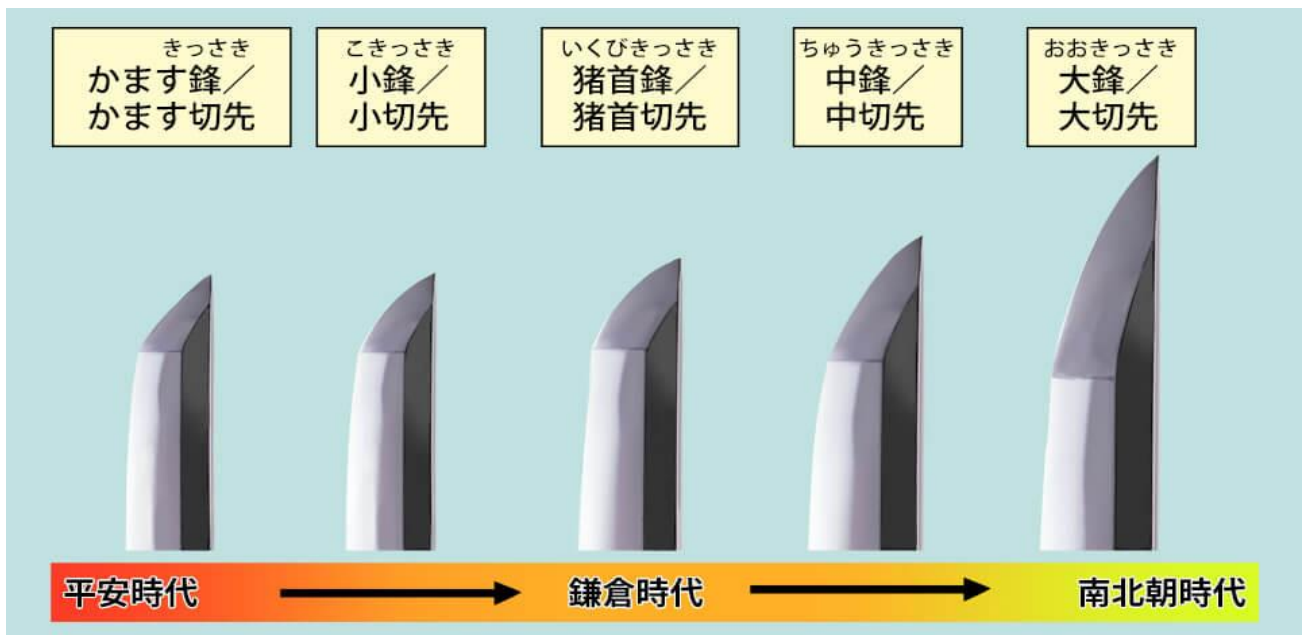
そして当時の太刀、猪首切先（切先が短い）の重ねの厚い太刀の欠点が立証されました。

例えば最も損傷しやすい猪首切先の焼詰方式の<sup>ぼうし</sup>鉾子では一度の戦いで刃こぼれが生じると、研げば<sup>ぼうし</sup>鉾子が無くなり太刀全体が駄目になります。



<sup>ぼうし</sup>鉾子は切先に現れる波紋。

重ねが薄く焼き入れが難しい。



これまでの重ねの厚い太刀では重く戦場で振り廻すこともできず、切れ味が悪く蒙古軍の皮を重ねた鎧を斬ることが出来ませんでした。

そこで大鎧を断ち切るための太刀姿から刀の刃肉が少なくなると共に刺殺に便利のように切先が延びた姿になっていきます。焼きが弱ければ切れ味が悪く太刀自身も曲がるので鍛刀法の強化も必要でした。その時、青年刀匠であった五郎正宗が苦心研究して硬軟両種の鉄を適度に組み合わせて地肌を板目鍛という鍛え方により欠点を防ぎました。

いわゆる折れず、曲がらず、甲鎧をも断ち切るような実用兼備の相州伝を完成させました。



相州伝 正宗

以上

<参考文献>

日本刀の鑑定と観賞：金園社 常石英明

日本刀：岩波新書 本間順治

日本刀の歴史：金園社 常石英明

日本刀辞典：光芸出版 得能一男

古代の刀剣：吉川弘文館 小池信彦

<写真・図>

バーチャル刀剣博物館

「刀剣ワールド」より

文責：松成初博